

丸隈遺跡

福岡県筑紫野市大字山家所在遺跡の調査

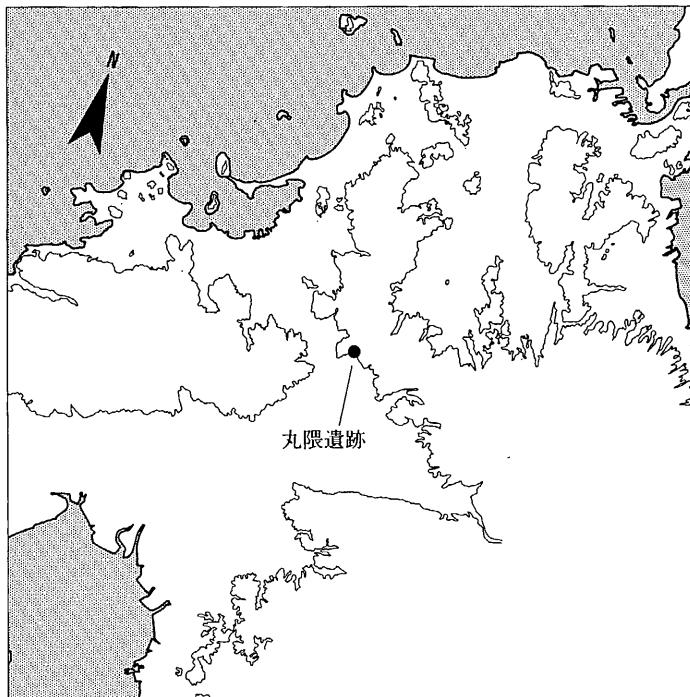
筑紫野市文化財調査報告書

第 16 集

1987

筑紫野市教育委員会

丸隈遺跡



序

この報告書は、500m²の宅地造成に先駆けて発掘調査した丸隈遺跡（山家地区）の調査結果である。

この調査では、中世後半の遺跡で中国製の青磁、石鍋、洪武通宝などが発掘されました。本書が文化財保護の認識と理解を深め、古代史の解明に少しでも役立てば幸甚であります。最後になりましたが、調査に際しまして御協力を賜わりました関係各位に対しまして、衷心より深く感謝申し上げます。

昭和62年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 松田康男

例　言

- 1、この報告書は、筑紫野市大字山家1906番地の1に所在する丸隈遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は、東邦土地開発株式会社の委託を受け、筑紫野市教育委員会が実施した。
- 3、本書に掲載した図は、奥村俊久が実測し、鶴味加代子が製図した。また、写真撮影は奥村が行なった。
- 4、本書の執筆、編集は奥村が担当した。

目　次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の内容	4
IV まとめ	8

I 調査に至る経過

昭和59年2月22日、福岡市早良区の石井明人氏から筑紫野市大字山家2906番地の1外9、639.12m²の開発事前協議の届出がなされ、これを受けて筑紫野市教育委員会では試掘調査を実施し、開発予定地の一部に埋蔵文化財が包蔵されている事を確認した。その後、開発が東邦土地開発株式会社で行なわれる事となり、協議の結果、東邦土地開発株式会社の委託を受け、筑紫野市教育委員会が調査主体として発掘調査を実施する事となった。昭和61年5月9日付けで、埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、5月13日から発掘調査を開始した。現地での発掘調査は昭和61年5月13日から同年6月14日まで実施した。また遺物整理は昭和61年8月1日より、8月30日まで行なった。

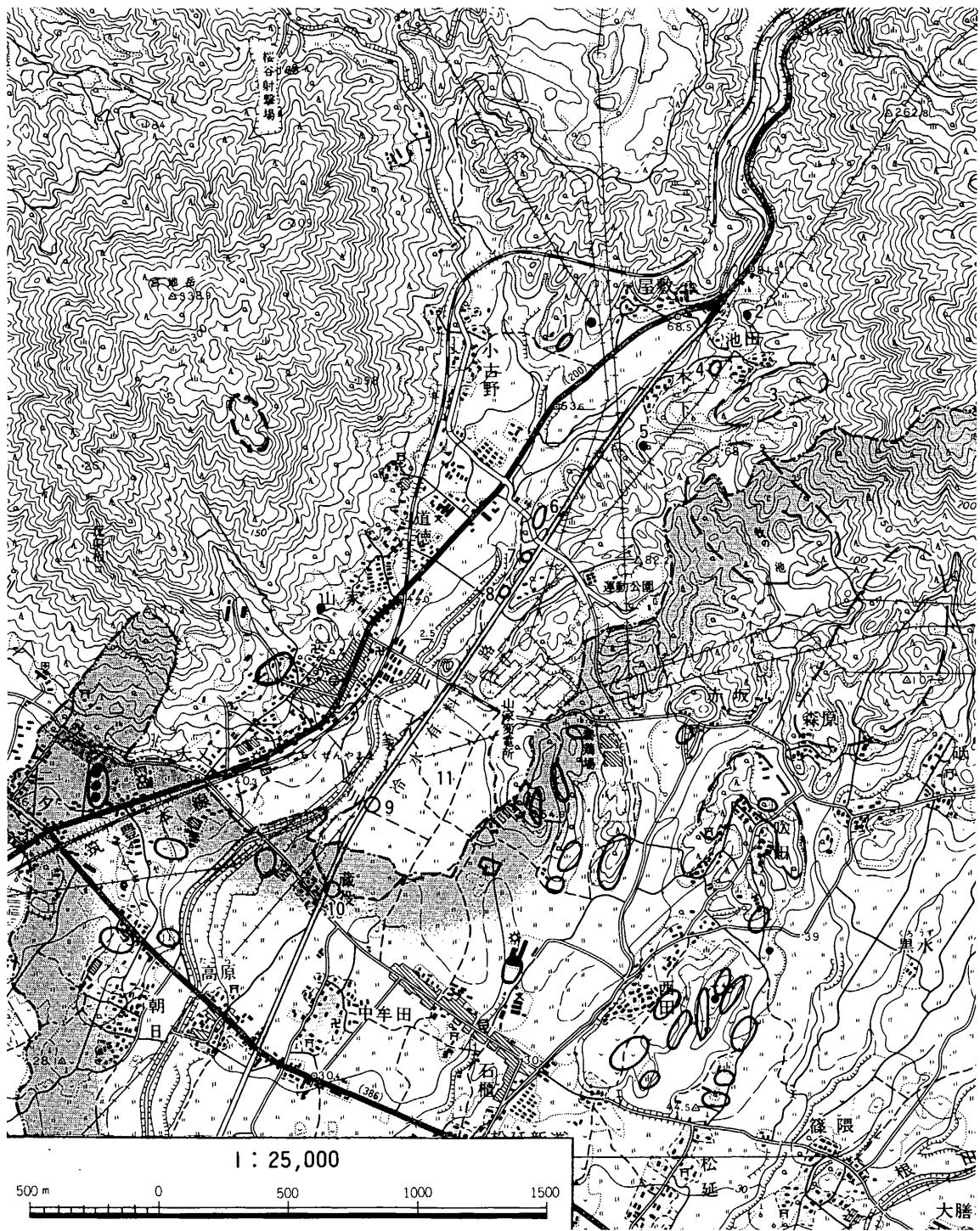
調査組織については下記のとおりである。

総括	筑紫野市教育委員会	教 育 長	松田康男
庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課	課長 山村 茂
		社会教育課	文化財係 係長 山野洋一
		社会教育課	文化財係 主事 奥村俊久
調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課	文化財係 主事 奥村俊久

II 位置と環境

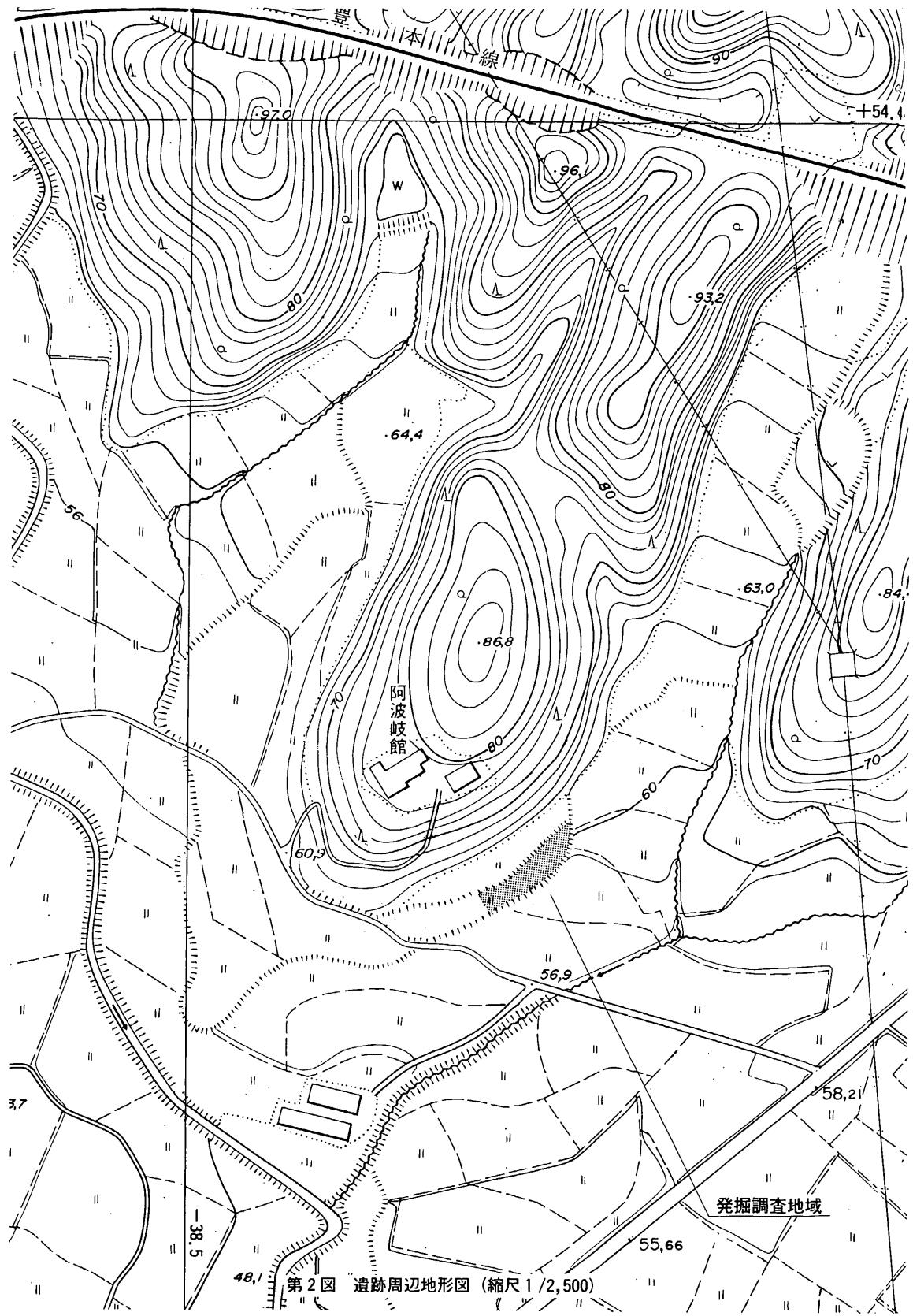
筑紫野市は、福岡市の南19kmに位置する。北西に福岡平野を、南に筑紫平野を望む古代からの交通の要所である。市内の北西には鷺田川があり、御笠川と合流して博多湾に注ぐ。東には筑紫平野北部を潤し、筑後川と合流して有明海に注ぐ宝満川がある。宝満川やその支流ぞいには数多くの遺跡が所在する。宝満川上流域から宮地岳(337m)を挟み東側にその支流である山家川が流れる。山家川は、山家冷水道ぞいに下り、筑前六宿の一つ山家宿の東側を、肥沃な平野を潤しつつ流れる。この周辺は、近年のほ場整備事業や九州横断自動車道建設に伴う発掘調査で著しい成果が上げられている甘木・朝倉平野の西端に当たる。山家宿の背部に位置する宮地岳には、円文や盾が描かれている殿様塚1号墳を始め多くの古墳があり、また山家川を挟み対面する平野部一帯には弥生・古墳時代を中心に数多くの遺跡が所在する。

丸隈遺跡は筑紫野市大字山家1906番地の1に所在する。山家川が山間を流れ、平野部に接する東側の高台、大根地山(625m)から延びる尾根の先端部に位置する。



第1図 丸隈遺跡周辺遺跡分布図

- 1 丸隈遺跡 2 池田8号古墳 3 池田1~7号古墳 4 池田遺跡
- 5 池田9号古墳 6 浮殿A遺跡 7 浮殿B遺跡 8 浮殿D遺跡 9 大島遺跡
- 10 八ヶ坪遺跡 11 山家地区遺跡



第2図 遺跡周辺地形図（縮尺1/2,500）

III 調査の内容

1、調査概要

開発予定地の大半は大根地山から延びる尾根の谷部となっている。谷部は最大地表より2.5mほど掘り下がたが、主に砂層が幾重にも重なるのみであった。谷部の西側尾根に二段に作り出された水田があり、その下段北半に遺跡が残っていた。上段は耕作土下はすぐに地山の花崗岩バイラン土となっており、かなり削平を受けた感じの土質である。下段南半は北半で検出した遺構面がゆるやかに下って行き、遺構は検出しえなかった。遺構は小ピットと土壤を中心とし、調査区北部は谷状になっており、ここからも遺物が出土した。

2、遺構と遺物

(1) SD 1

調査区南側で検出したものである。プランは $1.6 \times 0.9\text{m}$ の僅かに屈折する不整形橢円を呈し、底までは50cmほどである。北側には幅50cm足らず、深さ10cmほどの溝状の遺構が1mほど伸び、その端部には径35cmほどのピットがある。溝部の上には礫が多く残り、周辺にも散乱する。これらの礫の大半は一部分に火熱を受ける。溝部の礫の多くは熱を受けた部分は下方が多いが、側面に受けたものや、まったくその痕跡を止どめないものもあり、溝部壁面にも赤変は見られない。

遺物（第5図）

SD 1 から出土したものは、土師器が大半で、他に瓦質の鉢と青磁碗の破片が出土した。

出土したものは小片が多く、形態を復原しえるものは図化したもののみである。1は瓦質の鉢で、底径8.2cmを測る。底部は糸切り底で、体部は内外面ともヨコナデされ、内面底部は一方向からのナデが施される。胎土は良質で、焼成は堅緻である。2・3は土師器の皿である。

2は1/3ほど残存しているもので、口径8.6cm、器高1.0cm、底径7.4cmを測り、底部には板状圧痕が僅かに認められる。色調は黄褐色を呈し、胎土には金雲母の微粒子が多く含まれる。

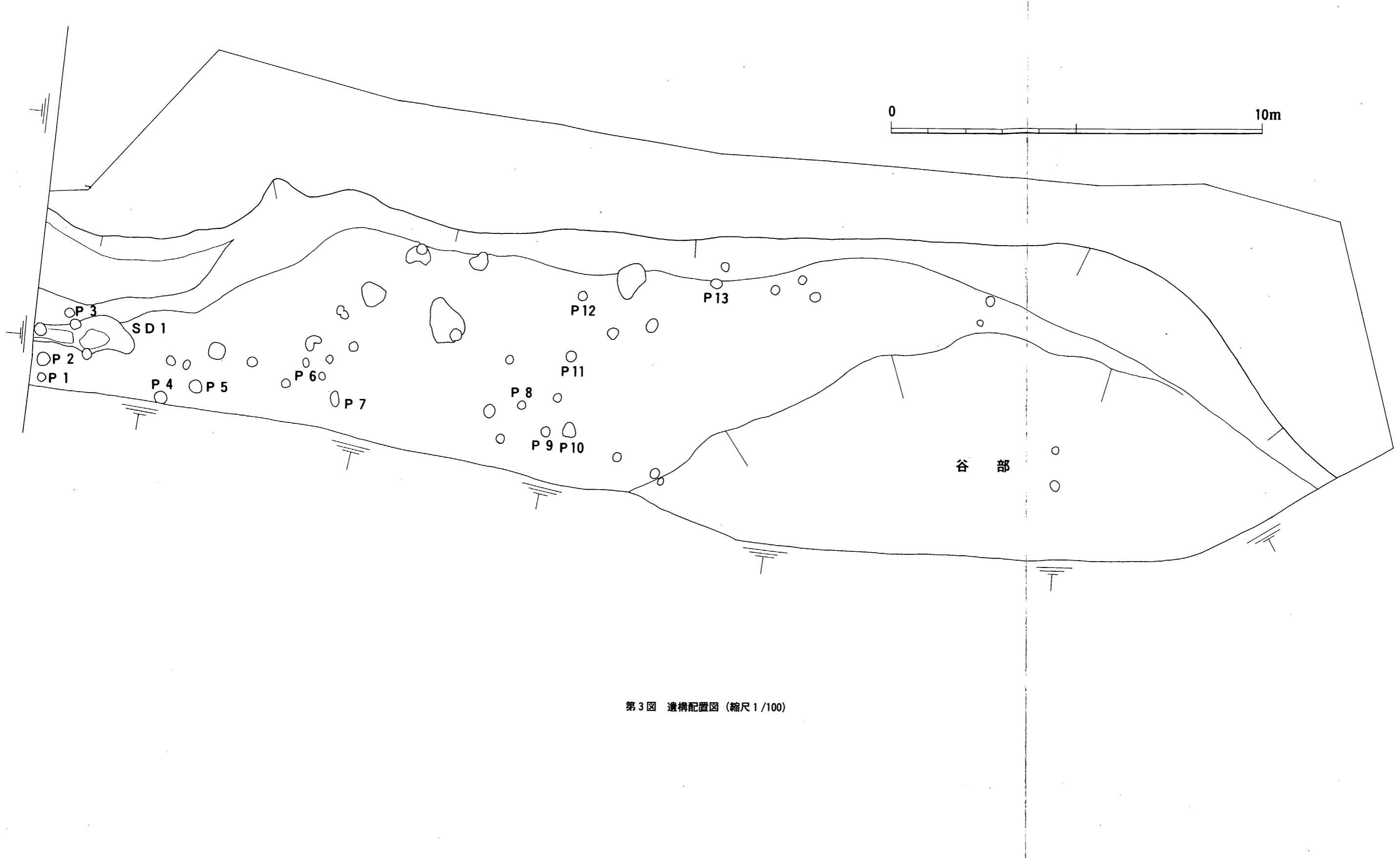
3は底部を1/2ほど残すもので、底径は6cmほどと推定される。底部には板状圧痕を残す。

(2) ピット群

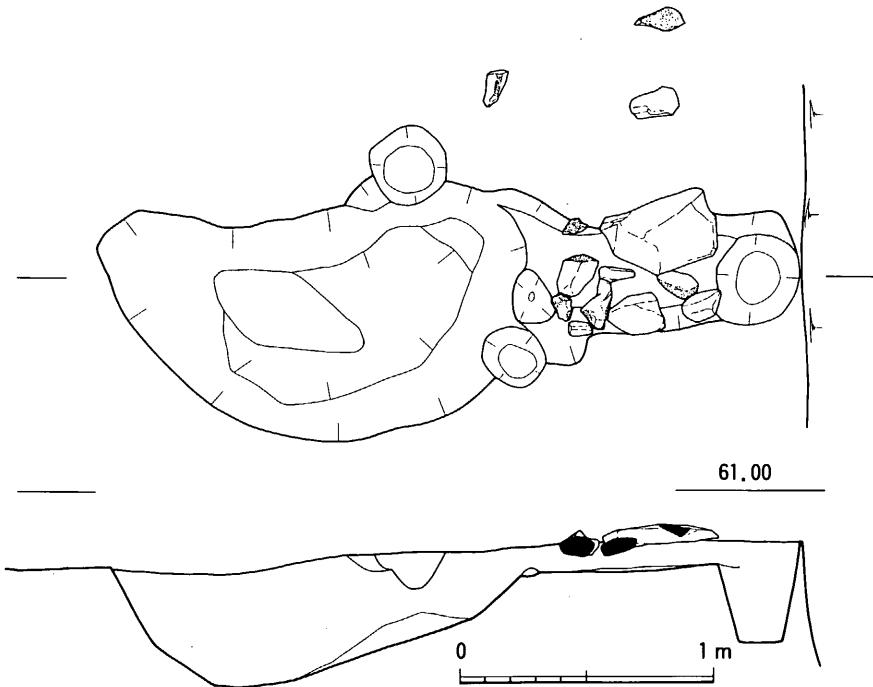
ピットは調査区南半で検出された。大半が20cm前後のもので、深いものは少ない。

遺物

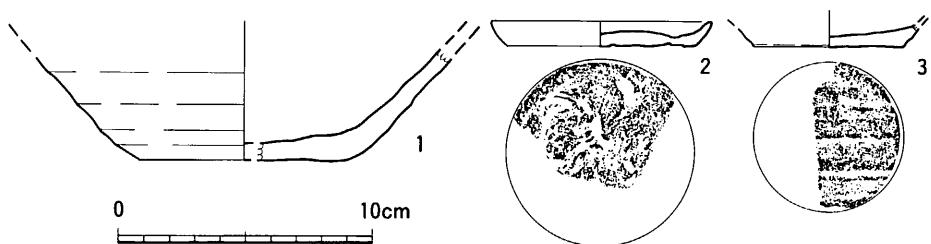
4はP 2 から出土した龍泉窯系青磁碗 I 5に属するものである。色調はやや青味がかった緑色を呈し、鎬蓮弁はシャープさを欠く。5～7はP 3 から出土したものである。5は須恵質甕の口縁部小片で、口縁下に一条の三角凸帯がめぐり、その下には刷毛目も認められる。6は土師器の皿で、口径7cm、器高1.5cm、底径4.4cmを測る小形のものである。色調は淡黄褐色～淡



第3図 遺構配置図（縮尺1/100）



第4図 SD 1 実測図（縮尺 1 /30）



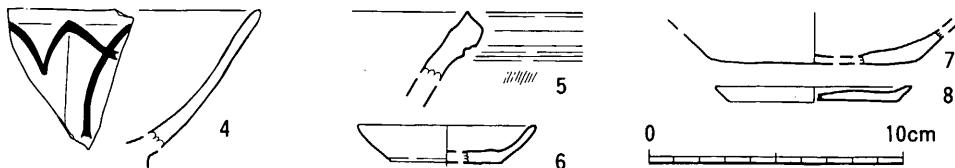
第5図 SD 1 出土遺物実測図（縮尺 1 /3）

灰色を呈し、焼成はあまり。7は杯の底部と思われるが、全体に摩滅が著しい。底径は8cmを測る。

他にP 3からは龍泉窯系青磁碗I 5に属す体部が出土している。8はP 5から出土した土師器皿で、1/3ほどの残存である。口径7.6cm、器高0.6cm、底径6.6cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、焼成はあまり、全体に摩滅している。

以上のはかにP 6・13からは弥生式土器片、P 4・14からは土師器の皿などの小片、P 10か

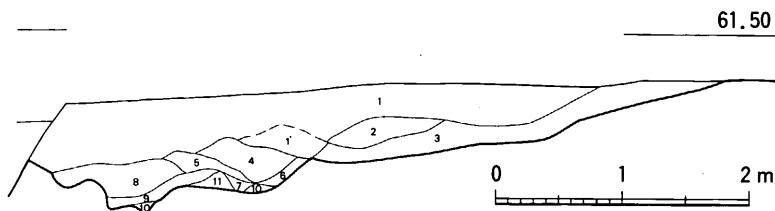
らは須恵質土器片や、土師器甕の口縁部片が出土した。



第6図 ピット出土遺物実測図（縮尺1/3）

(3) 谷部

調査区北部は谷状に窪みがあり、この部分から比較的多くの遺物が出土した。遺物はⅠ層から土師器を中心としたものが、Ⅲ層からは旧石器時代のものが出土した。これらはいずれも流れ込みの遺物である。



第7図 谷部断面実測図（縮尺1/60）

谷部断面観察表

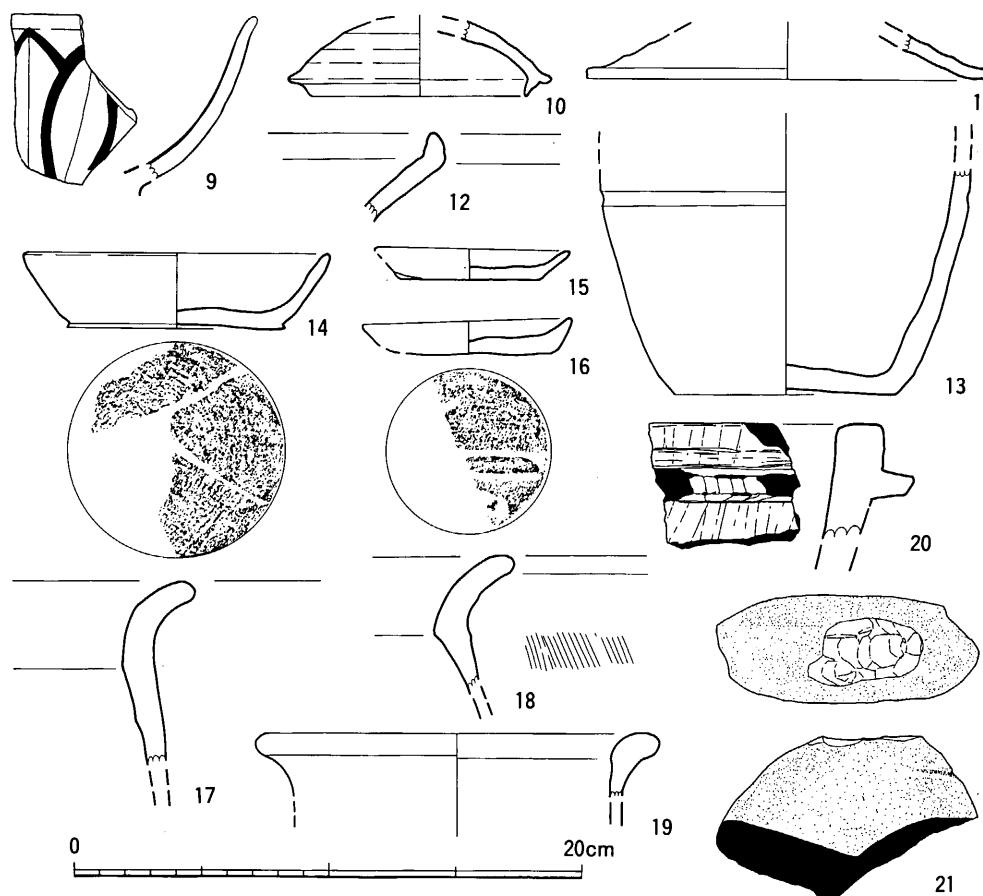
- | | |
|------------|--|
| 1 暗赤褐色土層 | (炭化物を比較的多目に含む 須恵器・土師器を含む) |
| 1' 黄白色土層 | (1層土を含む) |
| 2 黒灰色粗砂層 | (1層土をやや含む、砂は細かい粒子である) |
| 3 淡黒褐色土層 | (石片を含む) |
| 4 黒灰色粗砂層 | (2層とほぼ同じであるが、1層土をやや多く混入する) |
| 5 黒灰色粗砂層 | (4層とほぼ同じであるが、全体に色調が暗い) |
| 6 暗褐色土層 | (やや粘質を帯び、しまりが弱い) |
| 7 黒褐色土層 | (やや粘質を帯び、細砂を含む) |
| 8 黒灰色粗砂層 | (2・4・5層に近似するが、最も色調が暗く、粗砂の割合が低く、1層土が多い) |
| 9 黒色粘質土層 | (しまりが強い) |
| 10 黒灰色粘質土層 | (特長は9層と同じ) |
| 11 黄褐色土 | (細かい粒子の層で、しまりが強く、粘質が弱い) |
| 12 青灰色土層 | (細かい粒子の層で、しまりが強く、粘質が弱い) |

I層出土の遺物

遺物は表土に近い部分から多く出土した。9は龍泉窯系青磁碗Ⅰ5に属するものである。10～13は須恵器である。10は杯蓋の1/4ほどの破片である。口径8.4cm、最大径10.4cmを測る。胎土には1mm大の砂粒を僅かに含み、色調は暗青灰色、焼成は堅緻である。天井部にはヘラ記

号の一端が残る。この遺物は全体的に杯蓋の要素が強いが、杯身の可能性もある。11は脚裾部で、径15.8cmを測る。12・13はいずれも壺である。12は口縁部で、残存部はヨコナデされる。色調はやや青味が強い灰色で、胎土にはあまり大きな砂粒を含まない。焼成は良好である。13は下半部で、胴部にあまい凹線がめぐる。凹線付近と胴部内面はヨコナデされ、外面の下位は静止ヘラ削りが施される。底部は一方向からヘラ削りされる。色調は青灰色、胎土には0.5mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。14～19は土師器である。14は1/3ほど残存する杯で、口径12cm、器高3.0cm、底径4.4cmを測る。底部は糸切り離してあるが、全体に磨滅が著しい。15・16は皿で、それぞれ口径7.8cm、6.5cm、器高1.1cm、1.5cm、底径5.6cm、6.5cmを測る。色調はいずれも黄褐色を呈し、16には板状圧痕が残る。17～19は甕で、胴部内面はいずれも横方向のヘラ削りが施される。19は口縁部の1/4ほどが残っており、口径16.1cmを測る。

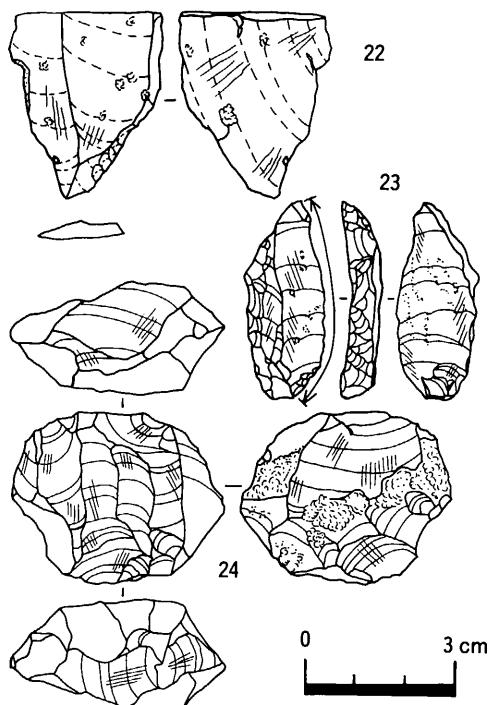
20は滑石製石鍋片で、口縁下2cmに鍔がめぐる。21は敲石である。石材は明確でないが火



第8図 I層出土の遺物実測図（縮尺1/3）

成岩の一種と考えられる。周囲はすり石として使用される。

註 磁器の分類については、横田賢次郎・森田 勉 著『大宰府出土の輸入中国陶磁器について 一型式分類と編年を中心にして』(1978 九州歴史資料館 研究論集4) にしたがった。



第9図 Ⅲ層出土の遺物実測図（縮尺1/3）

は暗褐色、焼成は良好である。

洪武通宝

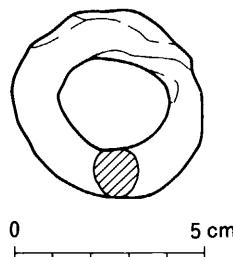
洪武通宝は周辺部が破損しており、裏面には福の文字が残る。

Ⅲ層出土の遺物

22はサヌカイト製の尖頭状石器である。一侧辺の先方に不規則な調整を施し、後半ともう一侧辺は素材をそのままで刃部とする23は黒耀石製のナイフ形石器で、一侧片にプランティングを施す。この剥離は先端に表からの剥離が若干みられるが、ほとんどは裏面から行なわれる。

24は両設打面の黒耀石製石核で、パティナが進んでいる。

(4) 表土出土の遺物



第10図 土環実測図
(縮尺1/2)

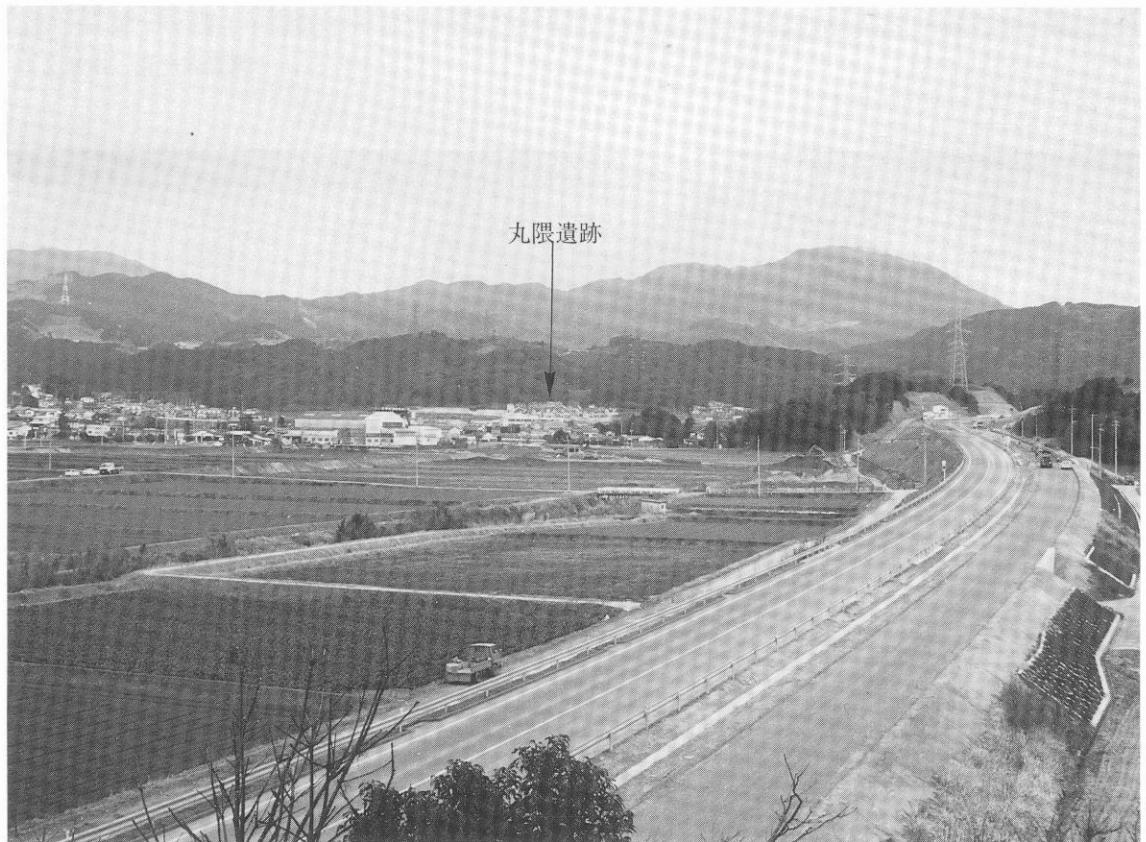
土環

粘土紐を環状につないだもので、径5cmを測る。胎土には0.5mmほどの砂粒を比較的多く含み、色調

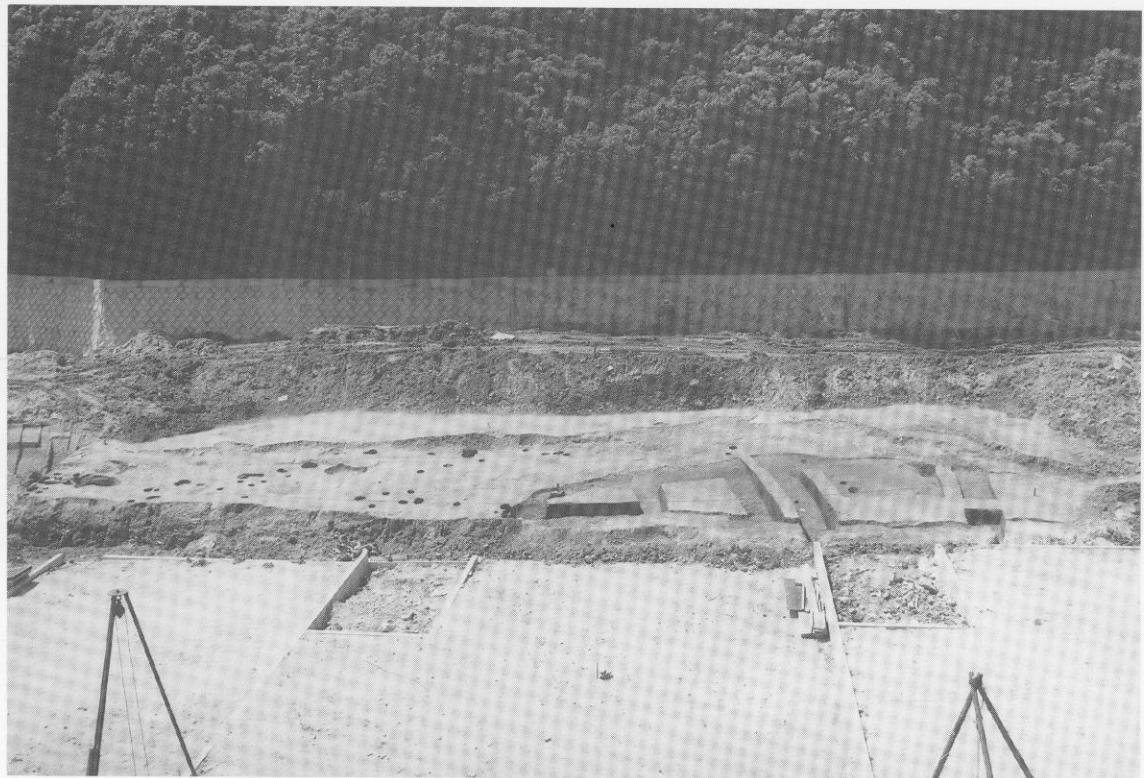
本遺跡では明確な遺構が少なく、また遺物も多くない。したがって丸隈遺跡の性格等については不明瞭な部分が多い。当遺跡から出土した土師器をみると。SD1から出土した2がSK610、3がSK1805以降、P3出土の6はSK1805以降、P5出土の8はSK1200～SD1805、谷部では14がSK624、15がSK830・822、16はSK601に比定しえる。また、龍泉窯系青磁I5がSD1やP2、谷部から出土している。本来ならば数多くの遺物の平均値から時期を推定

するべきであろうが、前述のように遺物の絶対数が少ないため個々の遺構に対する時期の誤差は少なくないと考えられる。遺構の性格もまた明瞭ではないが、平野部よりやや奥まった所に所在し、青磁や石鍋を含む内容をもつ中世後半の遺跡であり、背面の尾根などにも広がる可能性をもつ。

図版



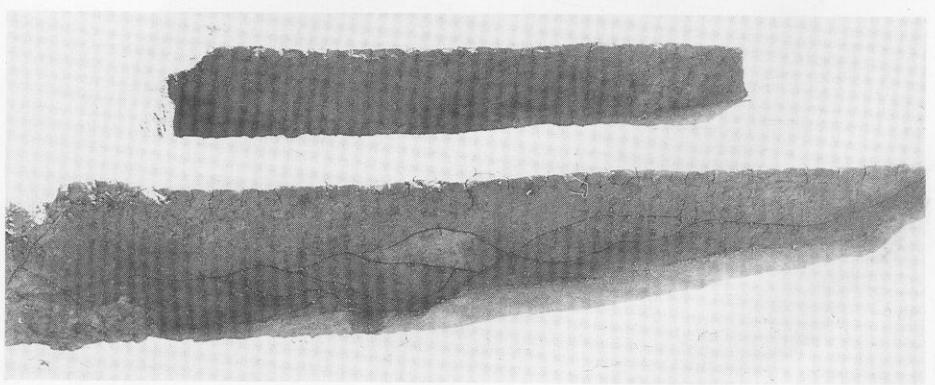
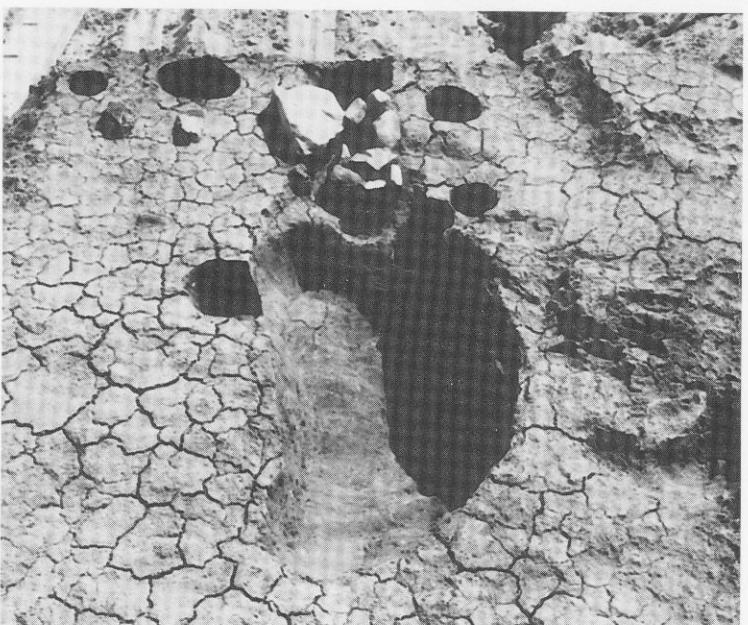
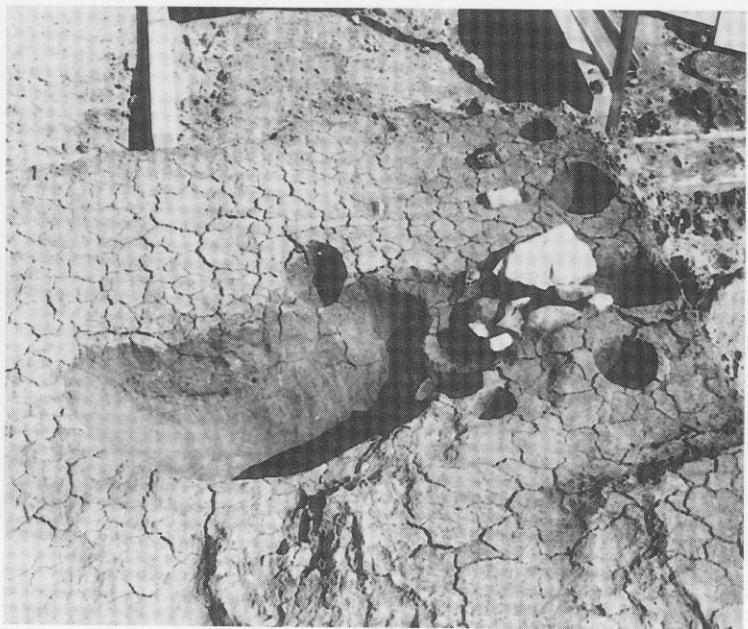
図版 1



調査区全景（南東より）



調査区全景（北東より）



図版 3



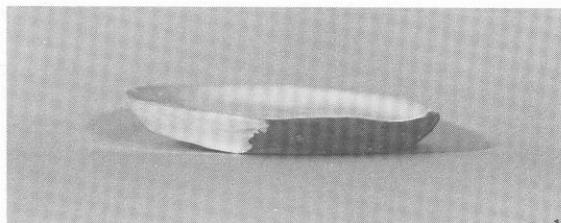
谷部出土青磁（表）



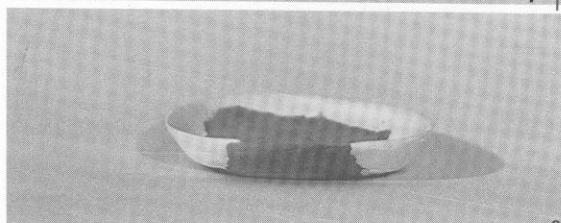
谷部出土青磁（裏）



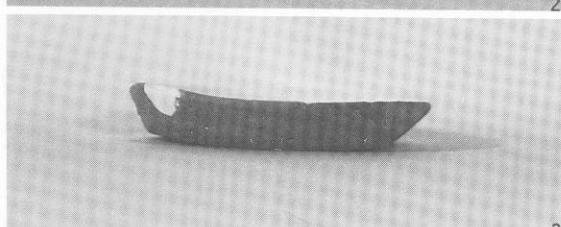
谷部出土土師器甕



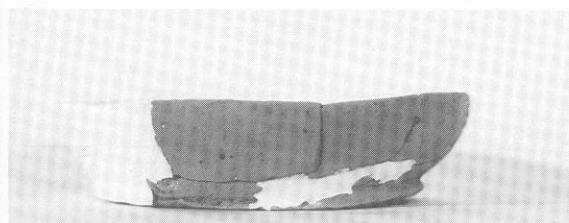
1



2



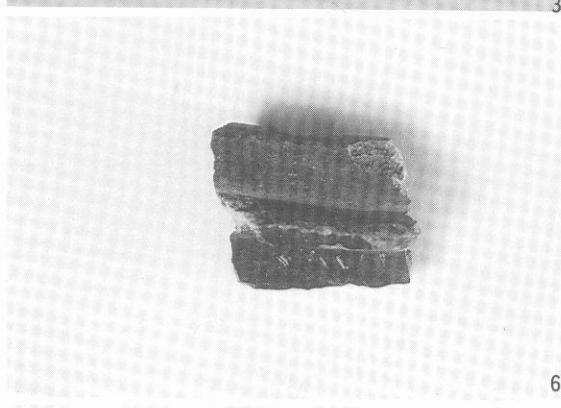
3



4



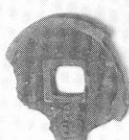
5



6



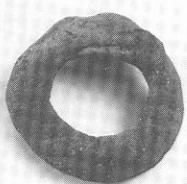
8



9



7



10



11



12

1 第5図 2

2 第8図 15

3 第8図 16

4 第8図 14

5 第8図 13

6 第8図 20

7 第8図 21

8 表出土土洪武通宝（表）

9 同（裏）

10 第10図

11 第9図 23

12 第9図 24

丸隈遺跡

筑紫野市文化財調査報告書

第 16 集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畠田町1番1号